

東洋的身体論の試み：西洋と東洋の相克

樋口聡（広島大学）

1. 東洋的身体論という問題

東洋的身体論と言った場合、すぐに思い至るのは、湯浅泰雄氏の東洋的身体論です。彼の著書『身体論：東洋的心身論と現代』（講談社学術文庫、1990年）において、湯浅は、「西洋の伝統的身体観においては、心的なものと身体的・物質的なものを分析的に区別する傾向がつよい¹」と言います。それと対比的に、心身の一体性を強調するのが東洋的身体論の特徴であると言います。このことだけを取り上げますと、それはすでに常識となった見方で、しばしば、西洋的心身二元論に対する東洋的心身一元論などと言われることがあります。そして、体育哲学やスポーツ哲学にとっては、身体を精神の下に置く心身二元論ではなく、心身一元論が重要であるなどということが語られることもありました。しかし、このような見方は、あまりに粗雑です。

湯浅は、「東洋と西洋の哲学の理論構成の方法論的基礎には、いちじるしい相違がある。この点をよく考えないと、東洋の身体論の独特な性質をとらえることはできない²」と言います。このことは何を意味するかと言うと、仮に西洋的身体論と東洋的身体論といったものが考えられたとして、それらは同じ前提のもとで、言ってみれば同じ土俵の上で出てきた二つの対立する考え方ということではない、ということです。東洋と西洋の哲学の理論構成の方法論的基礎には、著しい違いがあるのです。このことについて、湯浅は、ユングを引きながら、東洋は、西洋の意味における「形而上学」を決して生んだことはなかった、と言います。西洋の意味における「形而上学」とは、その源泉として、一つはアリストテレスの形而上学を、もう一つはキリスト教神学を考えることができるような性格のものでした³。一方で、東洋思想の哲学的独自性を、湯浅は、その基礎に「修行」の考え方が置かれていることに見ています。真の哲学的知は、単なる理論的思考によって得られるものではなく、「体得」あるいは「体認」によってのみ、認識できるものであるというのです⁴。

¹ 湯浅泰雄『身体論：東洋的心身論と現代』講談社学術文庫、1990年、20頁。

² 同書、21頁。

³ 同書、98-99頁。

⁴ 同書、21頁。

要するに、理論構成の意味が全く異なるのですから、西洋的身体論と東洋的身体論が同じ土俵の上で取っ組み合うなどということは、単純にはできない相談のはずです。両者は異なるゲームであり、それを一つのゲーム・マッチの中に押し込むことはできません。私に与えられたテーマの「西洋と東洋の相克」というサブタイトルも、そうした違和感において見ざるを得ないように思います。

東洋と西洋の哲学的方法的基礎の相違に十分に配慮することは、決して簡単なことではありません。東洋的身体論の具体例として取り上げられる、武道、芸能、中国哲学、禅仏教などにおける身体をめぐる議論は、いわゆる西洋的身体論と同じ問題意識から生まれたものではありません。芸能などでの議論を、「東洋的身体論」として解釈しようとするのが、そもそも東洋的ではなく、まさに西洋的なのです。この方法的差異に気づいて注意を促していた湯浅自身が、世阿弥のテキストから「身体」の問題を語り、その際、西洋の精神－身体二元論図式に無意識にも依拠してしまっていたことを、私は指摘しました。それについては、『身体教育の思想』（勁草書房、2005年）を参照してください。

山口一郎氏も、自身の著書『文化を生きる身体－間文化現象学試論』（知泉書館、2004年）で、湯浅の東洋的身体論を取り上げています。そこで、伝統の異なる考え方を対話にもたらそうとする研究の困難さを指摘し、そもそも考えるということが、生活の中でいかなる意味と価値をもつのか、それが改めて反省されなければならないと言います⁵。身体についての従来のデカルト的思考を超え、東洋に伝統的な新たな身体の捉え方を提示する可能性を考える場合、問題は、どのような意味でそれが「新しい」ないし、「デカルト以後の」と主張しうるのかという点だ⁶、という指摘は重要です。

この種の問題は、身体論だけに見られることではなく、例えば「芸術」をめぐっても、同様の問題性を指摘することができます。明治の初めに **fine arts** と呼ばれるものが日本に入ってきました。それらの中身は、絵画や彫刻などでしたから、そのことから自体であれば、明治以前の日本においても浮世絵や仏像といったものを例として、**fine arts** らしきものが存在していたと考えることができそうです。しかし、西洋の **fine arts** が独特のものとして有していたのが、**fine arts** を支える「理論」や「学問」でした。その代表が「美学」という学問です。書や絵や茶や華に親しみそれらを楽しむだけであれば、問う必然性のない、例えば「芸術とは何か」といった問いが言語的に問われることが、西洋の学問の伝統なの

⁵ 山口一郎『文化を生きる身体－間文化現象学試論－』知泉書館、2004年、35頁。

⁶ 同書、37頁。

です。この「西洋」へのまなざしのもとで初めて、東洋的芸術論（具体的には日本美術史など）が問題になりうるのです。そして、「芸術」という西洋的概念を相対化して、新たに「アート」とでも呼ぶべき観念を創出し、そこから、例えば、芸術教育とは異なるアート教育といったアイデアを生成することが可能です。これと同じことが、おそらく「東洋的身体論」にも求められるでしょう。

山口氏の『文化を生きる身体』を見てみますと、冒頭に、自分が日本人である、そのあり様が、他の文化に接触することを通して深く自覚されていく、その自覚と発見の道を開拓する原動力になるのが現象学だ、とあります⁷。そして、具体的には、「氣と身体」「武道の修行と身体性」「仏教哲学と身体性」「唯識哲学と身体性」「禅仏教における身体性」といったテーマが論じられており、この書物全体が、一つの「東洋的身体論」の試みだと言うことができるように思われます。

しかしながら、同時に、山口氏が一貫して取る考察方法はフッサール現象学だということにも、注意を払わなければなりません。通常の違いに従えば、フッサールは西洋の哲学者です。そのフッサールの現象学を方法、道具として用い、東洋の思想や行為や、あるいは日本人としての自分自身の経験を考察する。その際、方法として用いられる現象学は、具体的で歴史を体現している身体を哲学の基礎に置く。そして、身体を哲学の基礎とするとは、心と身体の繋がりの問題を真剣な問題として受け止め、自分の生き方を自覚するということである⁸。以上のことが『文化を生きる身体』の背後にあるのであり、それはまさに「東洋的身体論」ということが可能でしょう。ただし、それは、隘路に陥っている西洋を救済するものとしての東洋などという、東洋を単純に特権化してしまうような試みではなく、自分自身が東洋における日本人として生を受け存在しているという実存の問題への具体的なアプローチとして、です。

ここまで来てしまいますと、それは、逆に、東洋的身体論だとか、西洋的身体論などと言うことが、適切ではないとも言うべきかもしれません。フッサールによって発見され現象学という形で構成された人間存在のあり様に対する思惟の方法が、東洋と呼ばれる場所で生成され構築されたさまざまな行為の技法を明瞭に分析し説明する。そして、その分析や説明が、逆にまた現象学の方法の新たな進展へと寄与する。私たちが直面しているのは、そのような事態であり、それを東洋的と呼ぶ必然性はないからです。そうは言っても、仮

⁷ 同書、v 頁（はじめに）。

⁸ 同書、v-viii 頁（はじめに）。

に「東洋的身体論」と呼ばれる試みが積極的な形でなされるとしたら、それは、おそらく山口氏の『文化を生きる身体』のようなスタイルを取ることにならざるを得ないのではないかと考えます。

2. 相克から融合(?)へ

かつて1970年代の後半から80年代にかけて、私は、「スポーツの美学的研究」に取り組みました。それは私の学位論文として結実し、1987年には『スポーツの美学』(不昧堂出版)⁹として出版されました。その当時、スポーツを美学的に研究するために現象学的視点は極めて重要であり、スポーツにおける美的体験の考察などは、まさにノエシスの構造分析であり、志向性という契機がキーコンセプトでした。その当時、美学における芸術体験の分析は、もっぱら芸術の観照体験についてのものであり、それをスポーツの観戦体験に応用してみるということが、まずは私がなしたことでした。

しかしながら、スポーツの美的体験の考察においては、スポーツを実際にする人間、スポーツ実践者の体験分析が重要です。それが重要であると考えたのは、私自身のスポーツ実践者としての体験からの実感によります。そもそも、スポーツの美学的考察を企てようなどという要求は、私自身のスポーツの競技者としての実存的体験から来ているもので、それは「自分の生き方を自覚する」という現象学の精神と通底するものです。そうした中でどうしても向き合わなければならなかったのが、スポーツ実践者の美的体験であり、その当時、私は、それについて「美的対象なき美的体験」などと記述し、それはフッサー現象学のマキシムから逸脱しているのではないかと考えておりました。

しかし、この度、山口氏の『文化を生きる身体』において指摘されている、フッサー後期現象学の「受動的発生」という原理を知ることによって、私のスポーツ実践者の美的体験についての考察態度が間違いではなかったことを確信することができました。スポーツ実践者の美的体験の分析は、中井正一の「スポーツ気分の構造」という論考にも多くを負っており、そこで図らずも問題となった「気分」概念は、東洋的と見なされる「気」の問題と通じるものであったことも、改めて理解することができました。ハイデガーに起源を持つとされる中井の気分(Stimmung)概念、それをもとに具体的なスポーツ体験に向き合ったとき、東洋的な「気」の考察が必然的に要請される。それを仮に「東洋的身体論」と呼んでみるとすれば、それはハイデガーに対する相克というよりも、むしろ融合とでも

⁹ 樋口聡『スポーツの美学』不昧堂出版、1987年。

言うべきものでしょう。ただ、この「融合」という語に含意される「とけて一つになる」といったイメージは必ずしも妥当ではありません。中井の考察は、ハイデガーの存在論を或る意味では超越していたなどと私はかつて書きましたが、それはハイデガーに対して直面することから来る超越性ではなく、むしろ、ハイデガーの「本来性」といった問題の地平を、美的な方向へと自由に変更してしまったというのが正確なところだというのが、私の解釈です¹⁰。

さて、具体的な身体的体験における西洋と東洋の哲学の出会いということで取り上げられるテキストの一つに、オイゲン・ヘリゲルの『弓と禅』（福村出版、1977年）があります。山口氏の『文化を生きる身体』でも取り上げられており、呼吸に関連して出てくる気づきの問題について、フッサールの言う受動的綜合の働きが説明されています。そして、「我を忘れてその活動そのものになりきるという経験領域が、確かにある…それは西洋、東洋といった文化背景の違いにもかかわらず、また最も批判的で、理論的精神を体得しているヘリゲルのような哲学者にさえ、経験可能だ¹¹」と述べられています。西洋、東洋という文化的背景の違いを超えるものが確かにあり、しかし逆にそれがゆえに、弓を引くという身体的体験においてその文化の違いがまずは如実になります。そして、正しい呼吸で、その呼吸になりきって弓を引くことを乱す何ものかの存在が、フッサールの言う受動的綜合によって説明されるのです。

この同じテキストを、「身体」というタームにさらにこだわって解釈することも、また可能です。その例を、石田秀実氏の『気のコスモロジー』（岩波書店、2004年）に見ることができます。石田は、メルロ＝ポンティの身体図式は現在の私というコギト＝自己意識ではない、潜在化して身体に記憶され、習慣知と言えるようなものに化しているものを問題にしているけれども、それもまたコギトの群であり「表象性」を前提にしている点で極めて西歐的であると、批判します。ヘリゲルは、「心を全然働かせてはならない」と師に言われて、「それでは誰が射るのですか」と問うわけですが、メルロ＝ポンティの議論もこれと同一線上にあり、その答えとして潜在的な意味志向作用を起こしている沈黙せる「コギト」をメルロ＝ポンティは持ち出すのだと、石田は言うのです¹²。つまり、身体図式は、あくまで広い意味での意識の問題であり、身体そのものの知が問題になっていないという

¹⁰ Higuchi, S. “Heidegger’s Concept of Authenticity and Sport Experience” 『広島大学教育学部紀要』第39号、1991年、131-137頁。

¹¹ 山口、前掲書、109頁。

¹² 石田秀実『気のコスモロジー』岩波書店、2004年、138-143頁。

のです。

さて、「身体そのもの」とは何でしょうか。もちろん、石田は、「身体そのもの」などという観念的実在を考えているのではなく、彼の問題意識は、すべてが脳化されていく西欧近代文明への危機感から来ており、そこに東アジア的な思考と実践に傾斜した身体論の展開が企図されていると見るべきでしょう。要するに、何のために「東洋的身体論」なるものを企てるのか、ということへの自覚の問題です。このことは、特に体育哲学といった領域における身体論の展開においては、重要なことであるように思います。それを抜きにして、体育哲学においては身体への十全な理解が図られなければならないなどということは、実質的な意味を持ちえないでしょう。

ヘリゲルの『弓と禅』を取り上げたついでに、一つ言及しておきたいことがあります。それは、弓のような武道の修行はスポーツとは違うということが、あまりに簡単に言われてしまうことです。ヘリゲル自身も、弓射は同時に礼法でもあり、それはスポーツや体操の演技ではありえない、と述べています¹³。ここで意味されていることはもちろん理解可能なのですが、しかし、弓を引くことと自分自身が一体になる、つまり自分の身体の動きと意識が一つになるような体験や、競技者としての体験が人生を生きていくことに大きな意味を持つことなどは、もちろんのことながら、スポーツの体験においても全く同じ様に見えます。ここには、スポーツ理解の一つのパターン化されたあり様を見て取ることができますが、こうした問題は、スポーツ哲学のテーマとなりうるものでしょう。

現在、私が取り組んでいる研究テーマの一つに、アメリカの哲学者、リチャード・シュスターマンが提唱する「身体感性論 (somaesthetics)」があります。シュスターマンは、もともとイスラエル出身のユダヤ人で、オックスフォード大学で学び、アメリカで大学に職を得て分析美学から出発し、1990年代の半ばに、somaesthetics ということを出し出します。その背景には、フェルデンクライス・メソッドという身体訓練法への、彼自身の取り組みがあります。彼には、*Pragmatist Aesthetics*、*Practicing Philosophy*、*Performing Live*、*Surface and Depth* など、多くの著作がありますが、そのいくつかは、ドイツ語、フランス語ほかのヨーロッパの言語、その他東洋の言語にも翻訳されており、今、世界的な注目を集め、最も精力的に活躍する哲学者の一人です。

彼の哲学的背景は、完璧に西洋的です。しかしながら、somaesthetics といった論の構想を支える思想には、東洋的なものが極めて重要な役割を果たしています。彼は、2002

¹³ ヘリゲル (稲富栄次郎・上田武訳『弓と禅』福村出版、1977年、112-113頁。

年から 2003 年にかけての 1 年間、広島大学の私の講座、学習開発学講座の客員教授として、広島県の一地方都市、東広島市に滞在しました。そのとき、彼は、禅寺で座禅を学んでいます。その経験が彼の著作に直接登場することはありませんが、彼の生き方に間違いなく大きな影響を与えています。彼のこうした振る舞いを、一種のパフォーマンスだと毛嫌いする人々がいます。しかし、彼の著作を丁寧に紐解いてみれば、それが単なる誤解でしかないことは明らかになります。彼自身は、自ら「東洋的身体論」を展開しているなどと意識することはないでしょう。しかし、本シンポジウムにおいて私に与えられたテーマに即して、敢えて「東洋的身体論」ということを言うとしたら、シュスターマンの *somaesthetics* は、そのモデルの一つだと言うことができるように思われます。ちなみに、今、私は、何人かの方と一緒に、シュスターマンの *Practicing Philosophy* を翻訳しています。近いうちにそれが出版される予定ですので、その訳本を参照していただければ幸いです¹⁴。

¹⁴ シュスターマンについては、拙著「学習論として見た「身体感性論」の意義と可能性－R.Shustermanの所論をめぐって－」『広島大学大学院教育学研究科紀要（第一部）』第 51 号、2003 年、9-15 頁を参照。また、この紀要の同じ号の 17-24 頁に、シュスターマンの“Somaesthetics and Education”という論考が収録されている。また、Higuchi, S. “Eastern Mind-Body Theory and Somaesthetics” Wulf, C. et al. (Eds.) *Concepts of Aesthetic Education: Japanese and European Perspectives*, Münster: Waxmann, 2007, pp.88-96、Higuchi, S. “Ethical Learning and the Problem of Body” Marsal, E. et al. (Eds.) *Ethische Reflexionskompetenz im Grundschulalter: Konzepte des Philosophierens mit Kindern*, Frankfurt am Main: Peter Lang, 2007, pp.193-204、Higuchi, S. “Learning as Mimesis: Aspects of Play, Art and Morality” Camhy, D.G.(Ed.) *Philosophical Foundations of Innovative Learning*, Sankt Augustin: Academia Verlag, 2007, pp.124-130、Higuchi, S. “Mimesis and Play” Marsal, E. et al. (Eds.) *Das Spiel als Kulturtechnik des ethischen Lernens*, Münster: Lit Verlag, 2005, pp.33-46、樋口聡「教育における身体と知」『大学時報』第 313 号、2007 年、70-75 頁、も参照。